

TOEICスコア730点以上を取得し、東南アジアの企業や団体での約3週間に及ぶ「海外ビジネス研修」に参加する。これが、実践的な教育を重視する長崎県立大学経営学部国際経営学科の卒業要件の一つだ。高いハードルを設け、学生たちの潜在力を引き出していくのが狙いである。これまでの実績などについて、国際経営学科の岩重聡美学科長に聞いた。

ビジネスの現場で役割を果たす経験ができる

「海外ビジネス研修」を必修化した理由から教えてください。

岩重 グローバル人材の育成にあたり、国内ではどうしてもできないことがあります。それは学生たちに「外から日本を見る」経験をさせること。全学科生にその機会を提供したいと考えました。すでに多くの県内企業にとって、海外市場への展開、また外国人社員の受け入れなどは当たり前のものとなっており、それに対応できる人材が強く求められている。英語のスキルや経営の知識に加え、海外で働くことを「体感」した人材を輩出すべく、この研修を必修としています。

——研修の概要を教えてください。

岩重 夏場の現地訪問に向け、前期授業では訪問国や該当業種について徹底した

海外での「つまずき」の経験がグローバル人材への第一歩に



岩重聡美 (いわしげ・さとみ)
長崎県立大学 経営学部
国際経営学科 学科長

福岡大学大学院商学研究科博士後期課程単位取得満期退学。東亜大学校東北亜国際専門大学院博士後期課程修了。博士(国際学)。2008年、長崎県立大学経済学部教授。16年より現職。

岩重 成功体験も大事ですが、一方で「つまずき」を経験することが重要だと思っています。意思疎通や対話がうまくいかないことに加え、何より「自分の価値観が通用しない」。これを体験することが大きな意味を持ちます。

例えば「私は時間をきちんと守っているのに、現地の人は守らない」と言う学生がいます。しかし、習慣や仕事観が異なる人たちと共に働けるのがグローバル人材です。人種や信仰の違いを含めた多様性の中で、いかに誰もが納得する最適解を見いだしていくか。3週間の研修だけで身に付くスキルではありませんが、その大切さ、難しさを実感するには海外に出るのが一番です。

——グローバル人材に関心を持つ企業関係者など、読者へメッセージを。

岩重 学生の送り出しにあたり教職員は、受け入れ先のニーズと個々の学生の特性を考慮し、事前に数十時間に及ぶマッチ

事前研究を行います。そして現地では約3週間にわたり就業を体験。受け入れ企業によって業務はそれぞれで、例えばある学生は日系の物流企業で新規顧客を開拓する日本人社員の通訳を務めました。実はあまり研修に前向きでない学生でしたが、日本に戻るころには見違えるような変化を見せてくれました。単に英語が通じただけでなく、ビジネスの現場で役

割を果たせたことが達成感につながったのです。これは大学の中では経験できません。

自分の価値観が通用しない
それを知ることが大事

——研修の一番の意義はどんなところにあると考えていますか。



大久保文博 (おおくぼ・ふみひろ)
JETRO サービス産業部 商務・情報産業課
プロジェクトマネージャー

2008年にJETRO入構。15年7月から3年間、ホーチミン事務所プロジェクトディレクターを務める。18年7月より現職。

では、存在しないのと同じです。相手の思いを汲み取りながら、同時に自分の考えをはっきりと伝える。海外ビジネス研修を通じて、学生が少しでもその大切さを感じてくれたらうれしいですね。

研修の受け入れにあたっては、ホーチミン事務所のベトナム人スタッフが学生をサポートしました。ヒアリング先と一緒に検討したり、調査に同行したり。これが現地スタッフにも仕事を主体的に考えるチャンスになり、WIN-WINの関係を築くことができました。

研修期間中、毎日担当の岩重先生から学生の様子を気遣う連絡が入ったのも印象的です。これだけ学生を大事にする大学はなかなかありません。学生が新たな自分を見つける場として、海外ビジネス研修がさらに充実したものになることを願っています。



ベトナム・ホーチミンの旅行代理店で研修を行う長崎県立大学の学生ら。アウトバウンド専用窓口での業務などを担当した。

ング作業を行っています。それは、この海外ビジネス研修が学生の就職はもとより、人生にとって貴重な機会だと考えているから。行くからには必ず何かをつかんできてほしいと思っているからです。そのため現地でのつまずきや失敗に対しても、教職員は基本的に遠くから見守る姿勢を徹底しています。

研修後、自主的に短期留学に向くなど積極的に海外と関わりを持つ学生は少なくありません。また、多くが将来国際的な仕事に就くことを希望していることは、研修の一つの成果だと考えています。今後も、確かな語学力、経営やマーケティングの知識を備え、転んでも自ら立ち上がるたくましい人材を育てていきますので、ぜひ私たちの取り組みに注目していただければと思います。

グローバル人材の本質を知るには海外に出るのが近道

世界に拠点を構え、日本の輸出や投資の拡大を後押しするジェトロ。長崎県立大学とは2017年に包括的な連携推進に関する協定を結んでいる。そのジェトロのホーチミン事務所(ベトナム)も海外ビジネス研修の舞台だ。期間中、学生は長崎県産品の現地への輸出の可能性を探る調査活動を行った。当時、ホーチミン事務所に在籍していた大久保文博さんが研修の様子や意義などについて語ってくれた。

研修中、学生は地元消費者に商品の味見をしてもらい感想を聞いたり、現地のバイヤーにヒアリングしたりという活動を行いました。実は、こうした作業は海外進出を考える企業やジェトロ自身が行う調査活動と基本的には変わりません。その中で得られるのは、何より「ビジネスをストーリーでとらえる視点」です。嗜好や物価が異なる

る市場で商品がどう評価され、どんな経路でお客様に届くのか。それを具体的にイメージすることの大切さを肌で感じられる機会というのは本当に貴重だと思います。

「沈黙は金」は通用しない

加えて、学生にとって海外でさまざまな人と直にやりとりすること自体がかけがえのない経験でしょう。私は、グローバル人材の本質を「自分とは異なる思想や出自を持つ人を尊重しながら、自由闊達な議論ができる」ことだと思っています。そうした力を身に付けるには、やはり海外に出てみるのが近道です。

日本では「沈黙は金」ということわざが好まれますが、実際のグローバルビジネスの現場はある面で勝つか負けるかの世界。交渉の場で黙ってい



学生は事前に課題や目的を設定し、現地に臨む。写真は、シンガポールの日系公共機関にて研修に取り組む学生たち。